



四年前の四月、二十数年ぶりに東田布施小学校の校門をくぐった。私にとっては二度目の勤務となった。さて、着任式において大変感動したことがあった。体育館に入ると、全校児童二百六十七名が腰骨を立てて静座をしていたのである。児童数こそ半分近くに減ってはいたが、二十数年前と全く同じ光景であった。

この腰骨を立てる「立腰教育」とは、元神戸大学教授森信三先生が昭和三十年頃から提唱された、腰に注目した身構え、気構えの教育のことである。先生は、「腰骨を立てる」真義について、次のように述べておられる。

「人間として大事なことの一つは、一たん決心したことは、必ずやりぬく人間になることである。これは、意志力の問題であって、「やる気」とか「性根」に帰する。性根の確かな人間にしようと思えば、意識は瞬時に変転するものゆえ、その持続性を養うには、先ず体から押さえてかかるほかない。肉体を支える一番の柱は背骨であり、その中心は腰骨である。それゆえ『腰骨を立て貫く』以外に真に主体的な人間になる決め手はないといえる。」

昭和五十九年、「立腰教育」を基盤に据えた本校独自の教育活動を始めた。立腰教育の主なねらいは次の通りである。

○腰骨を立てることにより、我慢強さ

と主体性を養い、毅然とした態度で行動できるようにする。

○腰骨を立てることにより、集中力と持続力をもって学習に取り組むことができるようにする。

○静寂の中で瞑目し、自分の言動を振り返ることができるようにする。

○立腰の姿勢が全ての内臓の働きを活発にすることを知り、自ら健康の増進に努めることができるようにする。

主な取組としては、立腰タイムを設けて全校で一斉に実施している。また、入学式と卒業式以外の式は全て立腰の姿勢で行っている。

この腰骨の立て方は、岡田虎二郎先生の静座法によるものである。

○土ふまずを深く重ねて座る。

○尻をうんと後に出し、腰骨は少し痛いくらいに反らせて下腹を前に出す。

○首はまっすぐにしてあごを引き、下腹（丹田）に力を入れる。

○片方の親指を握る形で両手を組み、軽く下腹につけてももの上に置く。

立腰教育

田布施町立東田布施小学校長 河村 隆

飛耳長目

足をとめることはできないので...

光市立上島田小学校長 谷口 政 仁



「学校は楽しいところ でなければならぬ」というのが私の持論である。それは児童にとってももちろんのこと、教職員にとっても同様である。「楽しさ」とはただ和気藹々というだけではもちろんない。勉強が分かり、友達と仲良く語り、自分の夢や目標に向かって邁進する、これが児童にとって本当の楽しさである。教職員にとっては、自分の専門性や指導力を高め、他の教職員と良好な関係を築き、誇りとやり甲斐をもって教育にあたることである。このような「楽しさ」を児童・教職員が実感し、共有するところに学校の活性化が生まれると信じている。そしてそれは「信頼される学校づくり」へと繋がる。私はこのような学校づくりを目指していきたい。

新学習指導要領改訂に向けて大規模な教育改革が始まる。「グローバル人材育成のための英語教育改革」「特別の教科・道徳」がその代表である。また「全国の小・中学校のコミュニティ・スクール化」「小中一貫教育の強化推進」

「高大接続改革」などもそうである。こうした改革に向けて、校長として確かな識見をもち、学校の方向性を示さなければならぬ。大切なのは「なぜこの改革が必要とされ、始まるのか」として「船」を校長としての確に捉え、自分の言葉で語ることをできなければならない。「こうなっているから：」では到底教職員の納得は得られるはずもない。時代を読み、変化を読み、未来を予測することを通して、自分なりの教育に対する理念や信念をもっていなければならない。「改革」の背景にあるものは何か。そしてその意義は：。校長としてまだまだ勉強が必要である。

「楽しい学校づくり」には「確かな自分づくり」が必要なのである。自己研鑽に励み、多くの情報や考えに触れながらも、学校や地域の実態に即した教育課程を生み出していかなければならない。今までの経験や知識をフル稼働してもまだ十分ではない。

多くの子どもたちの夢を乗せた学校という「船」の舵取りを任された以上、安全で確かな航行を約束し、確実に子どもたちを目的地に連れて行かなければならない。校長になった以上は「足をとめることはできないので：」

る学校づくり」へと繋がる。私はこのような学校づくりを目指していきたい。